**「永遠のいのちを今日も生きる」**

**年間第15主日・Ｃ年（16.7.10）**

**みことばあなたの口と心にある**

　早速、今日の第一朗読ですが、旧約聖書にある申命記からとられております。この書物は、紀元前８世紀から６世紀にかけて北のイスラエル王国において編集されたいわばモーセの最後の説教集にほかなりません。ですから、その内容は、モーセがヨルダン川の向こう岸の彼方に約束の地を望み、自分自身の死を覚悟し切なる思いを込めて語った、であろう重大な教訓の集大成と言えましょう。したがって、今日の個所の冒頭で、次のように強調しているのであります。

　**「あなたは、あなたの神、主の御声に従って、この律法の書に記されている戒めと掟を守り、心を尽くして、あなたの神、主に立ち帰りなさい。」**

実は、モーセは、このような訓戒を、すでに６章で厳かに次のように命じております。

　**「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。**

**、わたしが命じるこれらのことばを心に留め、子どもたちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを語り聞かせなさい。」（申命記6.5-7）**

このように、すでにモーセの時代から、イスラエルの民はの異教の神々を退け、主なる神だけを礼拝するだけでなく、を尽くして神を愛するように命じられていたのであります。

　しかも、神を愛することを、今日の個所のように、**「主の御声に従って、戒めと掟を守り、心を尽くして、神に立ち帰りなさい」**と言い換えることができるのであります。そしてさらに、日々、みことばに聞き従うことの大切さを次のように強調しているのであります。

**「みことばわたしたちのごく近くにあり、わたしたちの口と心にあるので、それを行うことができるのであります。」**と。

ちなみに、昨年の待降節から導入した、ミサでの福音朗読において、わたしたちが、司祭と共に、額、唇、そして胸に十字のしるしをしるすのは、恐らくこの聖書の個所に由来するのではないでしょうか。

また、使徒ヤコブも、みことばを聞くだけでなく、それを実行することの大切さを、次のようにしたためております。

　**「みことばを行う人になりなさい。自分を、聞くだけで終わる者になってはいけません。みことばを聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつき顔を鏡に映して眺める人に似ています。鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐ忘れてしまいます。しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。」（ヤコブ1.22-25）**

また、なんと旧約の預言者エレミヤは、自らのみことば体験を次のように感動的に分かち合ってくれます。

　**「あなたのみことばが見出されたとき**

**わたしはそれをむさぼり食べました。**

**あなたのみことばはわたしの血となり肉となり**

**わたしの心は喜び躍りました。」（エレミヤ15.16）**

**行って同じようにしなさい**

　次に、今日の福音ですが、イエスご自身が、みことばの実践こそ永遠のいのちを生きることにほかならないことを、感動的なたとえを用いて直接問いかけてくださいます。

　**「『さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎにおそわれた人の隣人になったと思うか。』律法の専門家は言った。『その人を助けた人です。』そこで、イエスは言われた。『行って、あなたも同じようにしなさい。』」**と。

　それでは、このたとえを、もうすこし丁寧に振り返って見ましょう。

　まず、このたとえ話の真ん中の33節と34節に注目しますと、半殺しにされ道端に倒れているユダヤ人の旅人に近寄って行ったサマリア人の行動パターンがきわめて生き生きと描かれています。つまり、**「そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯して、自分のロバに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。」**と。

　ここで、さらに**「憐れに思い」**という一種独特な言い回しに注目して見ましょう。

　これは、御父のまさに特別ないつくしみを、イエスがみごとにその言動によって現す言葉遣いにほかなりません。ギリシャ語では「スプランクニゾマイ」となりますが、福音書で12回、イエスまたは御父についてのみ使われる言い回しであります。これは、あたかも腹に底からの強烈な情感を表わすことばであり、ヘブライ語では、「ラハミム」となりますが、それは神の胎内を意味します。ですから、御父の非常に深く、内的なそして激しい胎内の動きを、イエスこそが、その行動とことばで表現していると言えましょう。

　ですから、今日の場面で、このサマリア人の取った行動は、まさに神特有の憐れみを表わしたと言えるのではないでしょうか。

　ですから、わたしたもこのサマリア人にならって、まさに神の憐れみを自分の具体的な言動によって見事にあかしできるのではないでしょうか。

　なぜなら、イエスご自身が日々、この神の深い憐れみをわたしたちに注いてくださるからにほかなりません。

　したがって、ミサの度ごとに歌う「憐れみの賛歌」を、いつも深く味わうようこころかけゆではありませんか。

　最後に確認したいことは、永遠のとは、死んでから天国でいただくいのちではなく、まさにこの世の只中で、しかも極めて具体的にいきる新しいいのちにほかならないということであります。

　それは、イエスがくださった新しい愛の掟を、全身全霊を込めて実践することではないでしょうか。

　イエスは、日々わたしたちに、優しく命じておられます。

**「行って、あなたも同じようにしなさい。」**と。